

精神科デイケアの機能に関する一考察

ー参加観察をとおしてーⁱ⁾

Functions of psychiatric day care : based on data through participant observation

医療法人社団 清泉会布施病院 三浦 貴代
弘前大学保健管理センター 田名場 美雪

本研究の目的は、デイケアがメンバーを惹きつける要因を探り、実際にデイケアが果たしている機能について検討することである。デイケアメンバーを対象に主に参加観察法を行なった。結果、「デイケア場がメンバーを惹きつける要因」と「プログラム場がメンバーを惹きつける要因」と2つに整理できた。前者には、①家族から距離をとれること、②社会復帰(就労)の準備ができること、③他者との接点をもてること、④家以外に居られる場であることがあげられる。後者には、①役割をもてること、②自らの意志で自由に選択できること、③特定の人物と交流できること、④興味・関心が一致していることがあげられる。さらに、メンバーが生活する地域社会的背景や家族との関係を含む生活形態、それぞれの精神症状や身体症状および身体疾患が内的状況と関連していることが示唆された。また、メンバーの生活を維持し、自分らしいより快適な生活を構築する場であることが、当精神科デイケアの機能の一つであると考えられた。

第1章 問題と目的

第2章 方法

第3章 結果

第4章 考察

キーワード：精神科デイケア，参加観察

第1章 問題と目的

1. はじめに

民間の精神病院で心理士として働いている筆者は、週に一度、デイケアスタッフとして精神疾患を抱えている人達と過ごす。そこでは、楽しかったことや不満に思っていること、人生を振り返って今思うことなど、様々な思いが語られる。精神疾患を抱えると、日常生活が発症前と大きく変わることも多い。デイケアへの通所もその変化の中の一つであり、デイケア通所の続く人、続かない人と様々である。デイケアに来所し続けている人は、なぜデイケアに来るのだろうか。デイケアは魅力的な、あるいは有意義な場所になっているのだろうか。本論では、デイケアがメンバーを惹きつける要因を探索的に考えていきたい。

2. デイケアの歴史と意義

現行の精神科デイケアは、1946年、ロンドンとモントリオールで、それぞれ全く別個にはじめられた(奥宮, 2004)¹⁾。日本では、50年代に精神科デイケアが試みられるようになり、1987年保健所において「デイケア事業」が開始された。80年代以降、デイケアは各地に普及し、2000年には全国で991ヶ所と

i) 本論文は、平成16年度放送大学大学院臨床心理プログラムに提出した修士論文に基づくものである。

なった。そのほとんどは、病院に併設されたデイケアである。

奥宮(2004)¹⁾によると、デイケアの治療的意義には、①安心して治り続けることができる居場所としての機能(憩いの場、患者クラブ、心の根拠地)②社会復帰(社会生活能力の回復の機能)③外来診療機能の強化拡充④退院促進がある。また、浅野(1996)²⁾によると、精神科デイケアの機能は、①精神障害者の一人ひとりの自立を援助すること②病院と地域の橋渡しをすること③地域社会を障害者に開かれた場にする事である。

実際、各々のデイケアの形態は、通所する精神障害者の状態像やニーズ(生活の安定、就労の参加)、施設の違いや制約によって多様である。しかし、大きく分けて、社会生活能力の改善などによって自立や社会参加が可能になることを目指すリハビリテーションの要素の強いデイケアと、地域の生活を維持し生活に潤いをもたらすことを重視する支持的要素が強いデイケアとがあるとされている(高野, 1998)³⁾。

しかし、メンバーは自分の精神疾患について、「治り続けていく」というより「抑え続けていく」ものと捉えていることが多く、実際そのような場合もある。「自立を援助する」ということも容易ではない。特に病歴が長期にわたっているメンバーは、地域社会において自立を達成しようとする事が、病態増悪につながりうると話すことも多い。

3. 本研究の目的

筆者が勤務する精神病院は、病棟数3棟、病床数約200床で、デイケアは十数年前に開設された。利用者は約70名である。このデイケアにおいても、仲間作りができるような対人交流の場を提供したり、より自立した生活を送ることができるよう個別に対応しようと努めている。一方、このようなデイケア側の視点とは別に、メンバー側の視点があると考え、「何か惹かれるものがあるからデイケアを利用するのではないか」と考え、デイケアやプログラムが「メンバーを惹きつける要因」を通して、当デイケアの機能について検討する。

第2章 方法

対象との関わりを通してはじめて見えてくる相互主観的な理解が重要であると考えた。そこで、「外から距離をおいて見ていたのでは見えにくい現象の詳細に立ち入り、行為、できごとの意味を、内部に在るもの、あるいは行為者の視点から理解しようとするアプローチ」(南, 1997)⁴⁾である参加観察法を選択した。

1. 対象

(1) 対象者

本研究の対象者は、筆者がデイケアスタッフとして参加する曜日に参加登録し、来所していたデイケアメンバーである。参加登録者数は18名(10代から60代)で、毎週10名前後が参加している。

(2) 場所および概要

筆者が勤務する精神病院は5万人程度の市にある。この市は古くからこの地方の交通の要衝で、政治・経済・文化の中心地である。しかし、有効求人倍率は0.23倍と全国平均0.74倍(平成15年11月末現在)を大きく下回り、就労は精神障害者にとっても厳しい状況にある。デイケアでは、週5日、日中の6時間を過ごすことができ、プログラムは午前と午後に分かれている。

筆者は、X-2年より、週に2度、デイケアスタッフとして参加し、X-1年より、週に1度の参加となる。常勤のデイケアスタッフとは異なり、メンバーと面接室で個別に面接することはない。担当プログラム以外の時間帯は、メンバーが自由に行き交う食堂やホールなどで雑談をしたり、花札や卓球の

相手をして過ごしている。X+1年3月まで、就労前活動が行なわれ、メンバーが商品管理、買い入れ、販売、売上計算を行っていた。4年間続けられてきたが、喫茶グループを除いた販売活動はデイケアから当事者の会へと移行された。X+1年4月からは、プログラムは午前と午後に分かれ、ゲームクラブや筆者の担当するコラージュグループ「なごみ」などが始まった。

2. データ収集の方法

毎週、特定の曜日に、デイケア場面とプログラムにおいて、惹きつける要因に関連する会話や行動を中心に参加観察を行なった。また、デイケア場面以外でも病院内でメンバーと接する機会があるため、そこでの会話や行動も参加観察の対象とした。観察された内容はメンバーに影響を与えないよう配慮しメモをとった。X年4月から筆者が担当しているプログラムはオープングループで、各自一枚以上のコラージュを作り、完成後にそれぞれの作品を眺めながら感想を出すというものである。この時の様子は、テープレコーダーで録音した。また、常にメンバーと接しているスタッフからの情報や、デイケア終了後に行われるスタッフの話し合いで報告されたメンバーについての情報も収集した。デイケアでの業務終了した後、記録の補充を行い、さらに勤務終了後、記録の見直しを行なった。また、対象者と最も信頼関係を維持していると思われるスタッフにインタビューを行なった。

研究開始にあたり、病院責任者およびスタッフから目的や方法に関して合意を得ている。メンバーには研究の目的を説明し、テープレコーダー使用について許可を得ている。

3. 調査期間

X年6月より予備調査を開始し、X年9月からX+1年3月まで、就労前活動での調査を実施した。また、X+1年4月からX+1年11月まで、筆者が担当するプログラムでの参加観察を行なった（録音を行なったのはX年9月までである）。スタッフへのインタビューは、X+1年10月から11月に実施した。

第3章 結果

1. メンバーを惹きつける要因の概略

メンバーを惹きつける要因は、デイケアとプログラムに分けて整理できる。デイケアがメンバーを惹きつける要因として、①家族から距離をとれること、②社会復帰(就労)の準備ができること、③他者との接点をもてること(友人やスタッフと時間と空間を共有し、話ができる場)、④家以外に居られる場であることがあげられる。プログラムがメンバーを惹きつける要因として、①役割をもてること、②自らの意志で自由に選択できること、③特定の人物と交流できること、④興味・関心が一致していることがあげられる。

次節からは、上記事項を対象者の例をあげて述べる。その際、対象者であるメンバーの氏名は仮名にし、年齢、背景等に関しては、筆者の側で手を加えてある。スタッフの氏名に関しては、アルファベットで表記した。例をあげる際、対象者の発言を「」、筆者の発言を<>で示した。

2. デイケアがメンバーを惹きつける要因

(1) 家族から距離をとれること

優さん(40代)は統合失調症で、発症前には就労経験をもっている。家族と4人で暮らし、発症後も父親から就労するよう厳しく言われてきたという経緯をもつ。眠気が強く、日中でも眠ってしまうことを両親から注意され、自分でも眠らないよう努力している。病気のために家族に迷惑をかけているという気持ちが強いようである。以下は、就労前活動の作業中におけるやりとりの一部である。

「家にずっと居ると落ち着かないんだよね。僕、働いてないでしょ？家に居てもね、なんか、ん～・・・なんか最近眠くてね。(中略) 来れば疲れるけど、眠らなくていいし。」

俊介さん(20代)は、統合失調症を発症して数年が経つが、幻聴が活発で短期間に入退院を繰り返している。家族6人暮らしであり、同じ病気を抱える弟との折り合いが悪く、両親からは「兄だから我慢しろ」と言われている。「なごみ」の中での一部をあげる。

「親、ロウるせーんだけど、(中略)入院も考えたけど、家にいればストレスたまる。病院に来ればいいんだけど。(中略) デイケアさ来ればさっぱりする。」

上述の例からデイケアは、家に居ると感じるストレスから自由にしてくれる場所であるといえる。同居している家族から病気について十分な理解が得られなかったり、病者役割よりも会社員などの社会的な役割や家庭での兄という役割を期待されるなど、これらの役割と距離をおくためデイケアを利用すると考えられる。

(2) 社会(就労)復帰の準備をできること

前述の優さんは、デイケアで一定の時間を過ごし、体力をつけることが就労に必要であると考えている。参加曜日は不定期で、朝から参加はするものの、昼食後早退することが多い。昼休み、デイケア棟から離れた外来の待合室で、父親の迎えを待っていた優さんが次のように話したことがある。

「やっぱり、人と話すと疲れてしまうみたいで。(中略)早く働きたいなって思うんだけど、この病気もあるし、無理して体こわすのもいけないし。(中略)働くとなると朝8時から働いて5時まででしょ。僕体力ないから、まずはデイケアで体力つけようと思って来るんだけど。」

康司さんは、20代で統合失調症を発症し、対人関係のストレスから調子を崩すことが多い。一緒に暮らすアルコール依存症の父親を早く安心させたいと就労と結婚を強く望む40代の男性で、一般の就職試験を何度も受けるが、不採用に終わっている。履歴書の書き方について個別に担当していたMさんは、スタッフミーティングで次のように報告している。

「(康司さんが)前は『デイケア来てれば就職活動できないんだよな～。』って言ってた時もあったけど、履歴書の書き方とか話し合うようになってからはそういうことも言っていないし、すごく興味を示してるな。」

康司さんは、このような話し合いがもうけられてから、早退しなくなった。今までとは違う就労に向けての具体的な準備が、スタートしたためと考えられる。優さんの就労のための体力づくりは、その基礎固めと言える。どちらも家族と同居しており、家族からの社会的役割期待がストレスになりうる場合もあるが、就労へ目を向けるきっかけの一つとなり、ひとりひとりの状態に合わせての社会復帰準備が、惹きつける要因となったと考えられる。

(3) 他者との接点をもてること

一人暮らしの公哉さんは、家が遠いため、朝早くに起き、時間をかけて通所している。30代で統合失調症を発症したが、今は金銭管理、服薬、対人関係は安定しているようである。アカシジアのため、デイケア内を歩いていることが多い。X+1年の3月頃から活動への参加が減っていき、「何もやる気がしない」とスタッフに話すこともあった。以下は、筆者との会話の一部である。

「大儀でもデイケアに来るのは、一人でずっといてもよくないだろ。一人で居れば、いろいろ考え込んでしまうし、誰かが居れば違うけど、ここに来れば話したりできるしな。だから来るんだよな。」

秀一さんは、60代の男性で、一人暮らしをしている。非定型精神病と診断されていて、服薬していれば幻聴はないと話す。元妻が近くに住み、他県に住む二人の娘も度々孫を連れて遊びに来ているようである。次にあげる引用は、「なごみ」において、メンバー3人と私で作品を作りながら話していた時の、秀一さんの発言である。

「飲み友達みんな死んでしまって、一人ぼっちだ、おれ。友達、飲み友達探すかなって思ってもなかなか。デイケアに来れば一人ぐらい見つかるんじゃないかねーかなとかっても、みんな飲まね一人ばかりだもんな。」

ともに一人暮らしの例である。考え込んだり孤独を感じる一人きりという状況を避けるため、さらには新しい人間関係を築ききっかけとするために、デイケアを利用することもあると言える。

(4) 家以外に居られる場であること

デイケアを家以外に居ることのできる場として利用する場合がある。

肇さんは、一人暮らしをしている50代の男性で、躁うつ病を発症する以前には大工として働いてきた。その技術を生かして、庭のししおどしや五重塔の模型を作るなど、自宅でものを作ることが趣味の一つとなっている。デイケアに来所しなくなって約1年半ぶりに、再び来所し始めた頃、常勤スタッフであるMさんがデイケアを休んでいたときのことを、面接時に尋ねている。その際、肇さんは次のように言ったとのことである。

「最近、近所に住んでいる友達が、毎日家に来る。」と話し、その友達から「距離をとりたいたから、これから1ヶ月だけまた来る。」と言っていた。

肇さんが自ら決めた1ヶ月が経った頃、再びMさんは肇さんと面接をしている。そこでは、次のようにも話している。

Mさん「最初に一ヶ月って決めていたけど、来てて楽しいのであれば、やめなくてもいいんじゃないですか？『アウトドアクラブ』では楽しんでたじゃないですか。」肇さん「デイケアは、避難場所っていう来方もあると思うんだよ。そんな風に引き止めないでくれ。私には私の生活があるんだ。」と話していた。

肇さんにとって自宅は、日常生活の場であると同時に、ものを作るなど、自分の趣味に没頭できる場である。Mさんからの誘いを、「私には私の生活があるんだ。」と断っているように、肇さんには守るべき自分の生活があると考えられ、友人が毎日訪れることによって被侵入感を感じ、友人から距離をとるため「家以外の場」として、日中に6時間過ごすことのできるデイケアを再び利用し始めた。

3. プログラムがメンバーを惹きつける要因

(1) 役割をもてること

誠さんは、うつ病の男性（50代）で、販売活動がなされていた頃、主に食料品の販売を担当し、それ以外の作業も率先しておこなっていた。この時期には来所も定期的であったが、販売活動がなくなっからは徐々に来所しなくなった。以下は、月に1度、2ヶ所で販売活動を行っていた時期の、販売準備中のやりとりの一部である。

(中略) <今日の販売は1ヶ所だけですよ。> 「ないの?」 <はい> 「来ねば良かった〜。熱あってだるいのに。」

誠さんは、2ヶ所で販売活動を行なうときには、特に忙しいことを経験していたこともあり、多少無理をしても自分の役割を果たすために来所したと考えられる。

一史さんは、週に5日デイケアに通っており、どのプログラムにも積極的に参加していた。統合失調症により忘れっぽくなったことを自覚し、デイケアでの活動においては念入りの確認をするなどしているが、生活費の金銭管理が難しいようである。販売活動では、食料品の買い出しを担当し、どのような食品がよく売れるかを自分なりに調査していた。次は、販売活動の前に語られたものである。

「昨日、スーパーに行ってきた下見をしてきたらさ、いいのがあった。昨日考えたんだ。寝ないで考えた。」

プログラムにおいて役割を得たことで、積極的な参加がみられるのみならず、プログラム内容への関心、積極的取り組みが生じていると言える。

(2) 自らの意志で自由に選択できること

前述の肇さんは、以前は、デイケアでの麻雀に参加していたが、徐々に参加しなくなっていった。以下は、他のメンバーが麻雀をしているところを、肇さんと筆者で後ろから眺めながら話した内容の一部である。

<肇さんは麻雀できるんですね?今日は。> 「ん〜、周りからいろいろ言われるのが、あーしろ、こーしろとか。」

デイケアでの麻雀は、周りに見学者が集まりやすく、実際に行なっているメンバーの手について、思い思いに話をする場面がよくみられる。肇さんは、「あーしろ、こーしろ」と言われることで、自分の意志で実行することを妨げられるため、麻雀には入らなかったが、自分の意志で行なうことができれば、参加につながる可能性が高くなると考えられる。

(3) 特定の人物と交流できること

杏子さんは、夫と二人で暮らす非定型精神病の50代の女性で、精神症状はないようであるが、身体症状を訴えることが多い。夫は杏子さんに厳しく、離れて暮らす息子も精神疾患や金銭面などの問題を抱えている。杏子さんは家庭での生活に「疲れてしまった。」と話す。以下は、「なごみ」で作品を作りながら交わされた会話の一部である。

「Yさんのこと好きだ。Yさんのとこ行ってくる。」 <どういうところが好きですか?> 「気持ちやさしいとこと、人のこと寄せつけるような、雰囲気するところが好きだな。」

Yさんは、非常勤のスタッフで、デイケアに来るのは週に1日のみである。杏子さんは、Yさんの担当するプログラムには必ず参加している。家庭生活で抱える問題が多いため、わずかな時間でもやさしさを感じられるような人と同じ時間と空間を共有できることが惹きつける要因となっている。

(4) 興味・関心が一致していること

前述した秀一さんは、小説や俳句、絵画など、芸術的なものに興味・関心があり、X-1年まで行なわれていた「絵画クラブ」にも参加していた。デイケアの参加は不定期であるが、来たときには必ず「な

ごみ」に参加している。次にあげる引用は、筆者と秀一さんが、新聞を見ながら話していたときのものである。

秀一さんが書いた文章が、雑誌に掲載されたと話す。(中略) <よく書いてるんですか? > 「そういうの好きだからな。気が向けばな。絵でも何でも家にたまってしまって。置くところない。」

秀一さんは、自宅でも作品を作るほど、芸術的なものに興味・関心があり、「なごみ」もまた、それと一致しているため参加していると考えられる。

4. 要因の組合せ・変化を示す事例

(1) 複数の要因を同時にもつ事例

卓哉さんは一人暮らしで、週に5日、デイケアに参加している50代の方である。統合失調症を若い頃に発症し、今では精神症状を訴えることはないが、食事管理が難しく糖尿病によって体調を崩し入院することがしばしばある。「あまり考えないようにしている」という言葉がよく聞かれ、自宅では帰宅後すぐに眠り、早朝に起きて散歩がてら近くの駅でなじみの人と話をし、6時には病院の玄関でデイケアの仲間と会い、話をしながら玄関が開くのを待っているという。デイケア場面でも、友人やスタッフと話をしていることが多く、話し好きのようである。以前、Yさんが担当していた「絵画クラブ」には参加していなかったが、「なごみ」には毎回参加している。「自らの意志で自由に選択できること」がきっかけとなり、「興味・関心が一致している」コラージュグループへの参加につながった。次にあげる発言は、「なごみ」において、初参加のメンバーに作り方を説明していたときの一部である。

「切って、貼ればいいんだ。自分の思うとおりにね。考えるんじゃないんだ。ね。」

作品を作り終わってからは、「描くよりこっちの方が楽しい。描くの難しい。リアルでないとな。」と、話している。卓哉さんは、芸術的なものに興味はあったが、「絵画クラブ」では「リアル」に描かなければいけないと思い、参加しなかったと考えられる。しかし、「なごみ」で卓哉さんは、「リアル」に描かなければいけないというような制限を感じることなく作品を作りながら、メンバーやスタッフと話すことができる。卓哉さんにとって写真や絵を切って貼るという作業は、「自らの意志で自由に選択できる」機会となり、雑誌や作品を媒介に気楽に話をすることもできるため、「なごみ」への参加につながったと考えられる。

(2) 個人の内的状況の変化に伴い要因が変化する事例

メンバーを惹きつける要因は、時間や個人の内的な状況によって変化すると考えられる。

博之さんは、一人暮らしをしている50代の方である。統合失調症を発症してからも働き続けていたようである。デイケアを利用し始めてから10数年が経ち、数年前に始まった喫茶グループに、開始当初からマスターとして継続参加している。喫茶の準備をしながら次のように話している。

「病気になって、何回も入院して、10年ぐらい前に『入院しないように頑張る』って言って、デイケアに来いって言われてきたんだよな。一人でいればよくないからな。」(中略)「ここに来たばかりの時は、喋らなかつたもんな。」

博之さんは、一人で家にいることが病気の再燃につながることを経験し、「入院しないように頑張る」という目標で通所を開始した。当時は他者との言語的コミュニケーションを図ることは難しいよう

あったが、他者と時間と空間を共有できることに惹きつけられていたといえる。また、この会話の中で、当時デイケアを勧めたスタッフの名前が何度も出てきていたことから、そのスタッフとの交流も、魅力の一つとなったと考えられる。喫茶のマスターという役割を獲得した後、安定した時期を送るが、徐々に被害妄想もあらわれ、他者とのトラブルが目立つようになってきた。以下は、Yさんへのインタビューの一部である。

「マスターという役割を持つことで自己主張できるようになったと思うけど、その自己主張ができるようになった分、どう周りと折り合いをつけていくかが、彼の課題だよな。」

また、博之さんは、喫茶の準備をしながら次のように話している。

「何でも話すようになってから、ストレスなくなったもんな。はっきりもの言うようになったから、みんなから怖がられてるのも知ってるんだ。でも、それでいいんだ。(中略)今は思ったこと言って、動かなくなったら年寄りになってしまうはんで、動く！」と笑顔で話していた。

博之さんは、喫茶のマスターという役割を獲得し、自己表現の幅が広がった。それと同時にメンバー同士で作るクラブへの参加がみられるなど人間関係の幅も広がりを見せたが、その分ストレスも増えたと考えられる。そのストレスへの対処として、「はっきりものを言う」ようになりトラブルになったり、友人が離れていくこともあったが、博之さんはそのような状況を受け止め、納得した上で、デイケアに参加している。休む曜日は増えたが、喫茶グループには休まず参加している。役割の獲得が、積極的な参加を促し、結果的には対人関係の持ち方にも影響を与えていったといえる。

(3) 同時に複数の要因が内的状況の変化に伴い変化する事例

デイケアに惹きつけられる要因は、実際には同時に複数存在し、内的状況によって変化していくと考えられる。

肇さんは、他者の言動を被害的に受け止めやすく、1年半程デイケアには通所していなかったが、毎日自宅に来る友人から距離をとるため通所を再開した。前述のように、その時の肇さんをデイケアに惹きつける要因として、家以外に居られる場であったことがあげられるが、それに加え、「特定人物との交流」も惹きつける要因となっていたと考えられる。また、「特定人物との交流」の中で、「役割の獲得」が他者との関係性に影響し、プログラム参加への動機づけが高まったと思われる。以下は、再通所した頃の肇さんの発言である。Mさんは、肇さんから信頼されているスタッフの一人で、30代の男性である。

朝の話し合いで、Mさんが担当している〔免許をとろう〕という午前のプログラムに、誰も挙手しなかった(参加の意思を表明した人がいなかった)ところ、「〔免許をとろう〕のポスター作りに)関わったからな。」と話しながら挙手し、参加した。

この状況での「関わったからな。」という肇さんの言葉から、肇さんからみたMさんとの関係性が、「メンバーとスタッフ」というより、「年長者と年少者」とであると考えられる。二人で一つの作業を行ったことで、Mさんとは同じ作業者という「役割」をもつ人と人としてのつながりを感じ、年長者である肇さんが、参加者が誰もいないという状況の中にいる年少者のMさんに協力する形で参加している。Mさんとの信頼関係を基盤に、作業者という「役割の獲得」もまた一つの契機となって、プログラムへの参加につながったと考えられる。同日の午後の話し合いで、Mさんがスタッフとして入っている「ゲーム」でダーツを行うことをメンバーに伝えた時、肇さんは次のようにも話している。

「話聞いてくれたら、ダーツに参加する。」と話している。Mさんと肇さんは話し合う時間をもった後、Mさんが〔ゲーム〕に参加するかどうかを肇さんに任せるところ、早退した。

肇さんは、Mさんに「話を聞いてほしい」という思いを率直に表現している。その思いを受け止めてもらい、話をして満足感を得たため、早退したと考えられる。この時の肇さんにとって、Mさんとの関わりが特に重要であったと考えられる。

「避難場所」としての一ヶ月が経ち、肇さんはデイケアに参加しなくなった。外来受診は継続していたため、定期的に来院していた。以下は、Mさんが偶然待合室で肇さんに会ったときのやりとりである。

(中略)肇さんが「友達から竹をもらったから、それをばらばらに切って、庭にゲートボール場を作ったんだよ。」と話したので、「どうだった？」って尋ねたら「一人でやったら楽しくなかった。」と話していた。

肇さんにとって家は、日常生活の場であると同時に、ものを作る場でもある。友人からもらった竹で、デイケアで経験したゲートボール場を作り家でも行おうと試みたが、一人で遊んでみると孤独感が感じられ、多人数で行なう楽しさに気がついたと考えられる。しかし、このやりとりがあった1週間後、肇さんは「ゲートボール」ではなく「アウトドアクラブ」に再び参加し始めた。ここでは、「他者との接点をもてること」と同時に、より興味・関心が一致しているプログラムの内容がデイケアの魅力となり、再通所につながったと考えられる。以下は、「アウトドアクラブ」に参加するためデイケアに来ていた肇さんと、外来待合室で会った時の会話である。

(中略)肇さんにとって『アウトドアクラブ』の魅力って？> 「ん～、魅力か。いろいろ見れるとこだらうな。」
(中略)「木、見て、服見て、一人でも行くけども。(中略)Mさんの相手もしてやらないとな。」と言って笑う。

肇さんにとって、公園や百貨店など様々なものを見に出かけることも趣味の一つであり、興味・関心と一致する「アウトドアクラブ」に惹かれたと考えられる。また、「Mさんの相手もしてやらないとな。」という言葉からは、Mさんから必要とされていると感じていると解釈でき、相互に信頼関係が築かれているという安心感や充実感が含まれた表現であると考えられる。

友人との距離をとるため避難場所としてデイケアを利用していた中で、Mさんとの信頼関係の深まりや他者と共に過ごすことの楽しさを経験し、避難場所を必要としなくなってからは、他者と共に居ながら興味・関心の充実を図ろうとしていたと考えられる。

第4章 考察

これまで、デイケアとプログラムがメンバーを惹きつける要因をみてきたが、実際にこれらの要因は、メンバーの内面に単独で存在するのではなく、同時に複数存在し、内的状況の変化、時間の経過と共に変化すると考えられる。

さらに、デイケアにおけるメンバーを惹きつける要因は、単身生活者と家族との同居生活者の二つに分けて整理できる。単身生活者の場合の「家以外に居られる場であること」と同居生活者の「家族から距離をとれること」は、ともに自宅にいることを回避できることと言い換えることもできよう。また、今回の結果では、単身生活者に「社会復帰の準備(就労)ができること」が要因となっていると考えられる場面がなく、同居生活者のみに見られた。これは、継続して参加しているメンバー18名中11名が単身生活者であり、地域的に就労が困難で、すでに障害年金や生活保護などを利用した単身生活が比較的長

く、家族からの心配や一人暮らしでの金銭的な不安が、同居生活者のそれよりも低いためと考えられる。ここでは要因としてあげることではできなかったが、スタッフの受容的な関わりも一つの要因となっていると思われる。地域社会では、年齢相応の行動を期待されることが多く、受容的な姿勢で話を聞いてくれるような他者との交流をもてる場面が実際には少ないからではないかと考えられる。

プログラムにおけるメンバーを惹きつける要因では、プログラムでの活動の中で「これをやっていたら、他のことを考えなくてすむ」というような言葉が多く聞かれたことから、病気や対人関係などでうまくいかないなどを少しでも気にしないでいられることも、一つの要因ではないかと考えられる。

以上より、メンバーがデイケアに惹きつけられる要因は、生活する地域社会的背景や家族との関係を含む生活形態、それぞれの精神症状や身体症状および身体疾患が内的状況と関連していることが示唆される。地域社会的背景として、就労に結びつけていくことが困難で、作業所などの社会資源も限られているため、精神症状や身体症状が比較的安定し、就労へつなげられていくことができそうなメンバーであっても、デイケアの利用頻度が増えたり、期間が延びていくことは避けることのできない状況といえるであろう。そのため、デイケアが生活の一部となっているように思うメンバーも少なくない。メンバーは他に行く所がないから来ていると言うこともできる。しかし、彼らにとってデイケアは、病気を抱え就労したくてもできない状況の中で、今ある生活を維持したり、自分らしいより快適な生活を構築していこうとする場となっていると考えることができる。これは、前述の3事例からも示唆される。卓哉さんは、平日は毎日早朝の散歩をしてから来所し、帰宅後すぐに眠るという、デイケアを中心とした自分なりの生活を送っている。博之さんは、精神症状が活発になった時期もあったが、喫茶グループのマスターという役割をとおして、対人関係の持ち方が変化したと同時に、メンバー同士のクラブに参加するようになるなど、デイケアでの活動が、より快適な生活を構築していくことに影響を与えていると考えられる。肇さんは、デイケアを避難場所として利用していたが、その過程をとおして他者とともに興味・関心のあるものに取り組むことにも楽しさを見出し、今ある自分の生活を維持しつつ、その幅をひろげていったと思われる。これらより、デイケアがメンバーの生活を維持し、自分らしいより快適な生活を構築する場であるということは、一地方にある当精神科デイケアの機能の一つとしてあげられるのではないかと考えられる。

しかしながら、デイケアは社会復帰への通過点としてとらえたりリハビリテーション施設の一つであると考え、地域社会での活動を中心とした生活を送れるようにしていくことが目標となると考えられる。今回の研究結果をもとに、地域社会とメンバーをつなげるために必要なことを筆者のメンバーに対する姿勢も含めて検討し、デイケア活動を提案していくことが今後の課題である。

文 献

- 1) 奥宮祐正：デイ・ケア，氏原寛・亀口憲治・成田善弘・東山紘久・山中康裕(編)，心理臨床大辞典改訂版，培風館，2004，417-419
- 2) 浅野弘毅：精神科デイケアの実践的研究，岩崎学術出版，1996
- 3) 高野佳也：精神科リハビリテーション-精神科デイケア・SST・心理教育，小此木啓吾・深津千賀子・大野裕(編)，心の臨床家のための必携精神医学ハンドブック，創元社，1998，538-544
- 4) 南 博文：参加観察法とエスノメソドロジーの理論と技法，中澤 潤・大野裕明・南 博文(編)，心理学マニュアル-観察法，北大路書房，1997，36-45